千利休の出自・姓名・号について

メモ）鉄本　2022. 07. 20

「念仏寺築地修理料差文」展示コーナーで千利休を紹介する際の補足情報として、千利休の出自、姓、号に絞ってまとめました。（本文中、煩雑さを避けるため“利休”の名で通している。）

1．出自

（表千家第4代逢源斎宗左（1619～1672）による「千利休由緒書」（1653年）と表千家第9代了々斎宗左（1775～1825）による紀州藩提出の「由緒書」を基にまとめた。）

・元祖　生国城州　　田中五郎末孫　　田中千（当初は“専”）阿弥　（実名不知）　＊城州＝山城国

・二代　同上　　千阿弥実子総領　　千与兵衛

・三代　生国泉州　　千与兵衛実子総領　**与四郎**

＊「千利休由緒書」では、房総地方の新田里見氏の一族である田中義清を先祖としているが確証はない。

① 田中千阿弥　第6代将軍足利義教、第8代足利義政の「同朋衆」として「茶涌等奉行」を勤めた。

他に、香合、連歌等の分野も勤めた。（「満済准后日記」、「蔭涼軒日録」、「細川邸御成記」には、千阿弥という名の人物が3人現れており、年齢計算上「「細川邸御成記」の茶の湯に記録されている人物が当人の可能性がある。）

千阿弥は、応仁元年の事件（近習の侍11人が山名方に内通した疑い）で、一時、堺に隠棲。

その後、出仕したものの第9代足利義尚の死亡を機に堺に閑居（長享3年　1489）。

② 千与兵衛　父の“千”の字を取り千与兵衛と称し、堺今市町で商家を営む。田中の姓は晩年まで使用。

③ **与四郎**　大永2年（1522）　田中与兵衛の子として誕生　　＊三好長慶も同じ年に誕生

2. 千姓について

利休の父の代から千姓を名乗っているが、利休の愛弟子山上宗二（1544～1590）は、その「山上宗二記」の中の天正17年（1589）の記事で、“田中宗易”、“田中紹安”（利休の実子）と書いている。このことから、千姓に併せ、田中姓も使用していたものと思われる。　　＊“千”は屋号とする説もある。

3. 宗易号について

利休は天文14年（1545）頃に受戒し“**宗易**”を名乗った。法号“宗易”を授けた人物・時期は定説がない。

① 大徳寺90世**大林宗套**説　（「三斎公伝書」及び「南方録覚書」にある逸話）

天文14年（1545）、武野紹鴎の四畳半座敷開きに招待された際、与四郎は招待日を1日伸ばしてもらい、その間に京都大徳寺に出向き、大徳寺90世大林宗套（1480～1568）から宗易の法号を授けられた。

② 大徳寺107世笑嶺宗訴説　　＊笑嶺宗訴（1490～1568）

天文14年（1545）の時点では「笑嶺」の道号は授けられておらず、利休に法号を授ける資格がないため、この言い伝えは誤りと考えられる。

4. 利休居士号について

天正13年（1585）禁中（正親町天皇）より利休居士号を賜った。豊臣秀吉が禁中小御所にて茶会を開くにあたり、利休が無位無官のままでは参内を許されないことから勅許により居士号が下賜された。

道号“利休”の選定者については次のような説がある。

① 大徳寺117世**古渓宗陳説（通説）**； 天正11年（1583）に描かれた利休の肖像画には、古渓宗陳の賛に「**利休**宗易禅人」とある。同時に“抛筅斎”の斎号を受けている。　　＊古渓宗陳（1532～1597）

② 大徳寺90世大林宗套説（古窯研究家杉本捷雄氏、元京都市美術館館長村井康彦氏の説）； 利休の死後、千少庵が文禄4年（1595）に大徳寺122世仙岳宗洞（1545～1595）に“利休”の意義を尋ねている。この時、古渓宗陳は存命中であり撰者を差し置いて尋ねることは考えられないと主張。津田宗及（？～1591）が永禄9年（1564）に道号“天信”を受けており、同年代・同茶歴の利休が道号を受けた可能性がある。また武野紹鴎も48歳の時に“一閑”の居士号を受けている。居士号は特別な場合にのみ使用。禁中による“利休居士”下賜以前は“抛筅斎宗易”を使用している。66歳頃から“利休”を自称（「利休書状」）。

5.「利休」の意味

大徳寺111世春屋宗園（1525～1611）が“利休“の意を次のように頌している。 因みに、千道安（1546～1607　利休の長男）は慶長10年（1605）に春屋宗園に“利休”の意を尋ねている。

宗門に参得す老古錐
平生受用す截流（せつる）の機全く伎倆無し白頭の日
青山に対するに飽いて枕児を呼ぶ

（臨済禅・黄檗禅　公式サイトより抜粋）

使い古した錐は尖が摺りへって丸くなり、角もなく無用なものとして捨てられ、忘れ去られた存在になるように、平々凡々、愚に徹した人を老（閑）古錐と云い、截流とは、如何なる場所、如何なる時でもその境に応じて間髪を容れず対応出来る鋭利瞬発な働きの出来る事。白頭とはしらが頭、枕児とは枕の事。

宗門に参得す老古錐――利休居士は我が大灯国師の流れを汲む大徳寺の禅に参じ、悟了すれども悟りの「サ」の字も人に見せず、人知れず平々凡々、好々爺の如き老古錐の境涯の人である。

平生受用す截流の機会――思えば若い頃の居士は万縁万境に対して常に鋭利俊敏な大機大用を発揮していた。

全く伎倆無し白頭の日――しかし修行が進むにつれて、今やその鋭い機用も影をひそめ、ただ、平々凡々の老いた老人の如くである。

青山に対するに飽いて枕児を呼ぶ――長い年月をかけて学んだ法も、修した道もすっかり忘れ果てて、悠々自適、今日とても眼前の山も見飽きた。枕でも出して、のんびりと一休みでもしようか……。

6. ちょっと面白い逸話

① 【利休、茶碗を鳴らす】　利休の茶会で、客の一人が眠りかけた。目を覚まさせてやろうと利休は新茶碗の縁を茶筌でカタカタと鳴らしてやった。ところが利休の意図を知らぬ人々が噂を聞いて、茶を点てるときに皆茶碗を鳴らすことが流行してしまった。利休は、「新しい茶碗だから鳴らしたので、古い茶碗では決して鳴らしてはならぬ」と語った。

② 【侘びの茶道具】　ある田舎の侘び茶人が、利休へ金子1両を送って、何でも結構ですから茶湯の道具を買って送って下さいと頼んできた。利休はこの金で残らず白の麻布を買って送り、侘び茶人は何も特別な道具などいらぬ、茶巾さえ清らかであれば茶湯はできると諭した。

【参考文献】　・「千利休」　村井康彦　講談社学術文庫　2004
・茶道文化選書「利休の年譜」 千原弘臣　淡交社　1982
・「利休大事典」 淡交社　1989　　・「千利休　101の謎」 川口素生　PHP 研究所　2009
・「図説　千利休　その人と芸術」 村井康彦　河出書房新社　1999